



瑞

書

振



~ 5
1820



類集俳句藁



之尾 安古



神祇類

多士権現

宮人よ我名をとりては花葉川

花

火融芥命

弱力も是も如知るいりては

治徳

八る年の重麻

栴月村松尾おまゝの自然

言ふ

雪津川

是もよも多主の奥は送りり

其角

米ねの



木下物小末もあしむる菊の葉 平角
宰府を納

中とく子もた多居く 越にきり 平角

用家法辨の葉もあしむる

身の秋もあまもあしむる神楽山 平角

三葉を納

平福海や福有るあしむる焼くもと 平角

真日法乐

今等日秋のあしむる法をのまら屋ま 平角

信濃催る樂

○君まはの袖にせん信濃生その初まを 嵐雪

あつ又し子あしむる保

うらひを指観る

福妻あしむるぬ神子目さし 嵐雪

あつ又し子

あつ又し子あしむる馬末のあしむる 希周

荻栝天神を納

こほれ梅あしむるあしむるあしむる 嵐雪

北野法乐

新向の松引まをあしむるあしむる 希周

信吉を納

浦の松帆にあしむるあしむるあしむる 来山

神明を納

西の山は嵐雪

白雲の名のあるところを重く降 東山

同

伏しおむ村に何れもあつて 東山

伊吉とて

いふところの神の濱松をゆれと 東山

同

たきのこいれよま輪のころの重く 左

伊吉とて

の神のあやむまもそつゆの上 左

北野

よの首り下陰るに名あるや村 左 東林

神武山

紅葉に五百枝の彩や五十鈴川 東林

伊勢

言さや庭うたまる様もさく 希周

あつて山の上の葉をさくさく四方を
たのむに山の上の葉をさくさく四方を
ほの葉色いと艶あるかの神の
この大なるは

いふところの神

狩見く花の明大・神の歌 希

伊勢とて増えよ人の心をもたす

思ひ出さず

禪にいはれし如き一葉の香る風 花

二見の園をねむりて

うらふ風流の香も浦のまる 今

契田の社清し修庵有る以

塵直は鏡も清し一里のまふ 今

その岩戸ま

月やさしそ秋の色見る鏡の風 方山

伊勢法乐

まは昔も和光のちりりの一ツの風 許六

信長法乐

月名に出し一そ下りの陸の風 許六

夕立の田五ノノノノの社に首を祈るま

夕立の田五ノノノノの社に首を祈るま 平角

覆ぬの板中おそ祢に首を乞ふま

祢風のるくそ自く反の科 陣風

備中吉備津宮

禪の音くそそや清浄の山ひのま 唐元

層廟

そ申ふ祢もおそまはれた梅の月 采重

伊勢法乐

帯と袂を歌ふはよそそそふ風 清七

兵庫七宝の繁栄と云々

しんがの石河内と云々

大魯

紀州日崎宮

いふ昔や伊勢の日影のふ 鏡 清く

天満宮を祀

栴檀や白くも濃くも大自 立 瑞作

大非宮小治

非の補ふより言ふは自らの心 手角

磐田に

源太夫の言はれしを真 一巻 鼓通

白山を祀

非の柞より 林に志あり 果更

室の小嶋

煙くくくくくくくくくくく 全

席嶋

ひなまつり衣うらり 非の石 成るを

いなり

田原小浜を祀 藤原を祀 素書

和歌の浦

清き水に申すを 和歌の浦 手角

佐吉を祀

いくまを 鈴活よまりの 書 檜書

喜日山

麻の織 さらさらのりたさあが

奇測

香取法楽

梅咲てふ風をさるるあけり

升六

神取山

ささりあき旭ねぬ冬木立

奇測

象取山寺御

真の光清山の花をといく船政

完素

飛戸香取

先通の甲斐くそ見ぬれ梅に月

蓼々

い幡

此神の矢と行喜や下り舟

蓼々

香取廟を御

白梅の一すたに神一のり流が

左

飛戸清社

梅の香やいははくくふ庭あうら

左

香取法楽

江を越れ梅の香を此誓ふ

左

三十番神を御

番神のマモリや風の花 鏡

左

大神 宮法楽

僧に似たりとて宮中へをゆるされぬ五十鈴川の
流をなすことおかしきまじり

我々も鏡に以てて神涼〜 巻末

神武山

ハッの年あれもや 杉に村を 合

山王法乐

木の音より神や石ふん 村を 合

八丈嶋為朝明神開帳

夏列ヒキのちうも神の弓弦が 合

麻嶋

管絃を神代の家へ月見風 合

諏訪新宮

若うもおまにこゝろをたむ 合

霧岡社所

彩月やま橋の氣やう〜 巻末

檜別多田神社

秋ももをうけぬや松の護武者 合

飛戸層麻呂神社像宗扉

柳葉とては運命の母にけしきも清く新に〜
天下二幅の神像といふ

う〜弦も音う〜ら 神姿 合

天國の河紐を様も

清つるまの氷にさるやうの秋 合

是の生聖原とて雲有るに昔より此河紐を

ぬけに必る降と言傳〜乙巳の夜

又る乞食の事、今も非徒いふ事なく
しる事袖を流す

司の心と云うる所、稲の花
香を

此木と云非五月や梅の花
を

華風也
妙香山
華村

車去事十里膚毛に秋の峰
を

ふ多川見之川出る若く
吐月

香を

花梅を羽と後ひん句
吐月

守梅乃於ひわさる
平角

元禄十四年二月廿五日
忌於龜三河社詩奇連
社令興行一府

梅移や阿もむる数も
八幡寺宛
台

山上山下郡者ニツク

非久世町ハ
弥彦神社
流下

末の百たろくもや風のうら表 乙二

伊法乐

この法に松杉をとりおとす侍乳山の社跡を志す

空の墨に画のそきぬ村

後食露園

善松のり

天満宮を祀り白巻取

松梅を筆に写す

五王子稲荷

ちるし

山様

日暮里を祀り

此の戸をおもひ

古社宮奉紙

前に置る

金びり

地んむく

戸隠山

お梨の天く

柿本社

たふ

麻

浮鴨のゆき雪さくふ崎根の氷 奥松

露の園の秋生會ねとて待宵の月
うけそと雪の下に居るうりに侍り 試樂の笛に
あはれさうふうれぬ明れの朝露の本の百
たつくと樂人のまのまははらり
社傳書に似てたふをさるる神のまのまの
巖まゝるるに陛下登志つまるる松の嵐勢
をさとのめぬ

烏帽子さくく白玉の若田のし 嵐雪

二見にさく

岩のうに神風さくく風をさ 其角

清近宮の良枝とてあはれさく

大工達の久しき形や神の秋 其角

清宮に海をさく

清種をたてて髪はるるまはらさく 乞

内宮法師のまねあはれ

身の秋や赤子とてはる神話山 乞

外宮

只の秋や古殿の雪ののふく肌 乞
いづれもわらわらうらうはるはらに
申付るあり

大工や小判さくくく菊の葉 乞

斐田

まこと祿臣の軒や於み月 其角

五津嶋海

りのいづつ文井の月をむる能 空

遊私福寺

木屨や六末中人有るも 生

大山

腰押やうらる岩根に下も 空

三嶋法乐 系神大山祇命

魚名の附もまことゆり 田久 養

白鷺社

志の松の環をまたえん松のくれ 空

大神宮

舟の日のまに音なり 向田 忠 流

神丸の宮

神垣や根の松を踏むまこと 空

大素

卷のつやぬい角半の物むら 空

佐よ 法乐

葉の端と層のはけいも白髪 空

龜戸

松梅のふにまのま 其のころ 存

社路のうら 唯ひと 元也梅屋敷 存茂

本田福成奉納

非類に似る也田明~~の~~等 平五 台

如月二十五日菅神法事

子の子見 ころに似る梅の意 乙二

牛の宮八幡の境内市中を去る咫尺を

林泉とこしあふくふくさしたる他山形

神もひをささる也

菊落の庵もさうらの菊さし 土 乃房

筑前博多豊村梅舎子飛梅乃枝一寸

阿まう袖と 事と阿とらるこれ字鹿の

其蘭者とさうて囊中に細るる一六

宮に門人非田氏月^の集とく^の此の

神を原く信しをさる飛戸の瑞籬六

阿ゆきを運ぶる月日経て急る予

おしくくみる奇木張せ下に秘文

壺人より此人にしそ阿とめと是地六

月子よりこを限なく則そ其本をこ

雪像の彫刻ありぬ我本意とけぬる

嬉 したその侍く 阿とまをさ福し

こまの神翁とぬははるけり集

海と阿る神に梅飛折言ひぬ 夢を

任去法田

乳香の拉女法田の乙女しきあはし
川井の若をのうまーとあまのうまー

神

苗やり

をうまの忘る

養を

●牛法田

木の

育より 神やま

林

生

麻嶋

若

うまをまーの 花

涼師

青梅天神

母

にまも何して自立や梅の花

柳

必宮

神のまつもの

卯

のむもまて 悪木の多る

麦林

井生嶋

涼

さや法にまー 井生嶋

素輪

蝶通

此

方へ寄り法も借さる五月間

涼師

轉岡

涼

さや法のあるれも 雪の下

台

野々宮

足

けつるや稲も秋の事て山菜垣

平郎

菅神

二番目にして何しん神もさち 希肉

大宰府

清も洗に事して所おれりる 涼俣

井生綿

水多の備ふるもや井生綿 麦林

菅神

袖は皆汗衣の像や冬よ 梅 其梅

三編にて

二本の杉のむすしお後の 裾裾 麦林

同

至りりや杉をさるも 社とも 素堂

何者にて

春風に白鷺の白し 松の中 真山

身延七面

月影に神も数ある面り 風 岡原

上の祓禊

うつむいて夢や平野の神の数 台

聖宮にて

暖帳中の淋しさるる 扇 鹿野

大津精大明神と神

反蔭やうる是元と何 松の月 善を

月おの神おれりて行路の言れ興

ふくく八十瀬をわくわくぬ塵外五里の
山陰くして本社の雲に会友破れ寄
生とくをかき採ておの何じしふ
きけあるにいかんかきつるを陰
神まもるころ川中を流る山の奥 嵐重
香良洲

さるさるや二角にさるさる 桜こもて 希岡
酒おりの言にさる

火とりの神もさるさる月と音 岡更
中野

葉木木ゆとる せきを採りいづる時 某村

春 文よはけと新なるも梅の必齋きふ 遊糸
龜戸天神

々 常や松よの帰すみそれ入 柳居
三圍福荷

之 苗代よあま山子と現 かるし林 全
牛湯前

互 酒中花も涼そねたり 以袋 全
新田の宮

春 物脊のり子物毛 家北前 全
桃子湯石野

林カ

春

燕の脈は概ん字の文の記し

柳居

川越三芳野天社

秋

比叡の留まやうとれむの厚の厚

左

沼生川崎を満宮

冬

初も此、毛をこくをまや松系

左

越後岩舟社

沖の浪やたのめを

左

駿河三保神社

夏

菰あつたの三保の宮と

左

伊勢外宮

冬

廿の志い、いたまは宮を

左

内宮ハ俗屋のお祈り五十
鈴川を隔てるのた
おまれのふ

冬

夕木を、固よもろのふ本五

左

早倉社

冬

下宮よ沙燈乃、まやあつ早

左

事、尾のたを満宮

秋

松茸もさうそ沙急雪の解り

左

あまの喜日明社

冬

夕月の必兼、結いす、社を麻

左

伊豆三崎明社

五 卯の花の重くぬや神子の化粧の
塔沢懸る構現。 柳石

六 沢蟹のあゆま運びて神涼し
伊勢より 左

七 扇より流るるぬれり也此の宮
尾島廣敷の幡書 左

八 糸井やうま引くる神あら
人丸社 左

秋 柿の木のみまきや神のうしろ楯
徳村の幡書 左

五 筆やうま此神の子育ら
れ 左

冊除出や村大社

五 物ども生ひ隠しつや昔の花
全外宮 左

六 こしきもつや晝ハ木の百の宮有
全岩戸 左

六 及びあまの岩戸を懸くも新
水燈 左

六 名とくますのや法燈の花も
鬼子母神 左

六 子母人の子のころも
永田場山王詣 左

六 秋海ぬ僧正ひまらう かきつる 柳石

儀通の詠

六 昔乏の歌やさるくしてまほらう 台

鶴ヶ岡

六 船面は風のうらや 社人を 左

こらの出は秋のうらや

志やよ結やう志やかし

うらやゆく音女もあ

さやえ辛海の神宮は福つ

春 焼塩の辛海のさくらさうらう 土朗

廿六

大徳心院のまゝお見付り

灌頂の鬘より出くさくさく

其年

得正観音像

子に達修と志は海ぬきはひれ

台

三州の酒井村観音多純

如意橋や 軒もついで日影

台

南宗茶師との陰る書

涼風や 眠漕く舟の茶師も

言水

船中載敷の石橋本尊より十日徳武殿の月

舟中載敷の石橋本尊より十日徳武殿の月

物の中を流るる水

流る

芭蕉の墓多しの影のみ義仲庵一尋有り

あまの八咫主出奔をうけたり

何持もて拂ひ果りて木の雪

底重

草誓上人の岩室

燕みより道なりあつたる

台

法花をゆかり

法花をゆかり

台

妙高山

立去るる一里眉毛に秋の雪を

暮村

熊野

意取まじくお僧思あり

底重

高野山女人堂

百合もその姫といふ字と志あるは

毒林

木食堂

たふ不衣ま(粟)密柑も花の村

を

陀折

家眼は柳と見して涼けよ

を

殺生戒

虫殺すも殺すも殺すもいふん

貞徳

本教寺といふ

西風に何を自カに存つて

宗因

或智識して曰ふま祥大疾のまもるもや

稲妻にさしぬ人のさるせよ

明照もに存するにその徒の信心の根を

守る所の流也流るちる水葉

を

高野といふ

そあるに整をちりり奥の院

杜園

法隆寺に南無仏の古子をねむ

清禱のまつれあり紅の字

千那

ま如をにそ普光寺めま開帳の村

涼も野山といふる名佛が

去来

順礼の村

及び摺りのまもむ

初階山

を

煩悩あれを衆生あり

衆骨ををねてさるる人 鬼衆

浄土道

辻くちまじしもの西の山 百里

一夏山院ふは麓りて

牛にふる命点そ 新森夕まじり 支考

飲酒戒

舟の筆のこれやまじり 聖のたれ ひと

殺生戒

いふはとの虫の命たれ瓜作り 空

法系に講の侍りに女房の徳同まじり

覚つて法を庵これ真暗まじり

龍女成佛のふいふあつて志のふあつて

鼻のまじりのつれな

ほろくともなる涙や 蛇の玉 越人

弥陀光のつれな

小服糸にひらりてを玉 核 菊上

法然上人

啼きあつてつれな 霧弾

妓まじりにて

尼子の髪に接するまじり 希周

六月の末高野山にふりけり

蚊屋つらぬくも浮世の者だが 濫吹

山中の十堂

子日の梅さうさぬあま 証 曉

知恩院にて

柑あられもさの中あまの音も 重

町中に接わけつや知恩院 閑重

舟延山

○ 憚射あつみ経きつゝの音 法

義伸と師父の廓

色ともあふれるがらまはし 嵐重

江の崎

研

○ 友の日やさうるる 嵐のいふをり 嵐重

那智山

神祇のたより

○ 暑きのお湯に集る人の名 台

東嶽廟

石橋をみるゝ休む葉 重

江の崎

○ 日をおむはまのあまの神嵐 台

同

○ 江の崎の穴をうぐるや秋の夢 台

彌倉大佛

○ 明月の浦を渡る佛頂珠 台

仁和寺

いふつゆのやうな木葉。榎の
護國寺にある。母宮にてむらじり
白くやうな木葉にむらじり熱嶮峨

永代寺池邊

池を吾夫に入つての葉乃新

大悲心佛のまをる見物

浅草寺樹下

出つぬ根杏とよむへ申うき先

河州観心寺

楠の陰ぬれ。おたけり風

護國寺にならふ

ふ漬と洞こらまやうきつをた

比叡のありて

早合や双林塔の影の音

尾州浄教寺

燕もあまの片みくうそ

遊金閣寺

い響の楠の板石をまむ甘る

園場寺にけり

いひひくも三井の二まやま木立

遊弘福寺

我も死して碑に名を括尾云 善村

或法名をうにやうと

舞能日片のさかひを帽子 奠石

石山寺

总書の六十帖や春三月 空

南麻寺

蓮を去る糸花朝日夕のぬ 空

言野

蚊の居ぬも浮世の外そ松の月 空

祇王寺

尾寺や紅粉白粉も蚊屋の字 空

義仲寺

先達の一字を向むの子のさむ 空

那智山 車泊

山寺の歌立もみまの葉のぬ 空

道成寺

凌霄に木根撞くぬ暑さのぬ 空

常州畫上張頼政塚

世を字法と後らん若の燈 空

三井寺 湖月樓二句

不厚く鐘はく三井の納涼のぬ 空

山へのあふりも涼一茶峯松 空

七面山方丈

此句每部三アリ
作三句集

五の白く松句物多下

六月を禁下にしるる団煙裏が 尊を
駿府降福より

苦更く一層上の山物とてそは 台

此の要津をたてて社殿に新築を
すむ喫茶会といふ二句

傳ありしういふもそは清くも 台

そと成高や世々に巻葉の七部集 台

駿府清くも

何この印と結くともふ 台

親世音を被

甲子の子分てや田子とり 尊を

清く白濁す親音を被

なうけや何おもくあ音羽山 台

快林寺

筑後唐く隆臨ん 三月 台

六百も

六百の井や及をよの最志の字 台

文殊寺納

山麓や文殊の智恵のむきくるこ 台

泉岳寺

そのふの骨を添る 砌り 台

光明寺

朝夕や白栴檀に 薫くを 薫る

武州國分寺

擲るる瓦もこの所 秋の急 乞

江崎法樂

此神の玉にまればあり 雲のふ二 乞

東海寺

秋冬とる百十より 秋紅葉が 乞

海晏寺

先ひと木影射るをより 初紅葉 乞

行徳の徳影る上人の湯

念仏の念もあつる

秋の星

東海禪林經堂

木枯や一字不況の松の急 乞

大百寺

松の紅葉より 紅葉唯一樹より 乞

道明寺

天の月明の法鼓みや松の急 法

龍誓影

空を去る風急と 紅葉を未開紅 乞

井春寺

學の心や八角堂の影あり 乞

紀三井寺眺屋布引の松五六本あり

濱邊の松を裁やさく丹翠月松 乞

箕面湫 滝流を下三千尺

銀の河原河さるひや反紅菜 乞

四天王寺夜燈

白菊の阿まの月在の瓦 暮 升六

言燈

雪の形く洞見ん女人半 標也

刈草堂の縁起を算す

鴨牛のうらみろを見くう苔の下 奇刺

暖帳の程如め表并帳の日

七夕のふらふらとれ流し目の糸 華美

初瀬也

橋にあらをあらけり 也 奇刺

雪もくもくもるるを川さち 乞

志賀也

志賀もや橋にたの二人扶持 乙二

水戸無女を法乐

むのうもや女袴の厨子をひくも 存美

美仲も存の掬え **神神入**

ゆのうもや壘のあらりの桂も 乞

妙西禅林の昂事

はむ月やひらも筑波の雪の中 乞

滝不第

此地大なる岩山あり

○ 野分にはささげぬ岩根

存茂

佐白山

礼不觀世音

○ 雲を松木の葉も佐白山

乞

宗 雲岩にて

○ 止めし障る甘菊の板も五十所

乞

不思議な

糸之柄

何年丹尊

火者其

○ ありやいかに

神

乞

八王の妙業寺の大橋に

○ 先達の醫師也

乞

護國も

○ この音羽いとも

乞

お恩院

○ 法法云の坊も

法法を云ふ坊を侍りて云居禪師の

其久の

○ 臺の葉の

乞

蜘蛛満寺

○ 昔ふらふも

乞

中言

○ 帷子を

乞

半田中八幡の境内

在籍者の満員を減じ己の障の増しを
まこととせしむるは是れ徳なり

いづれもあらん **赤色** 也 字のす 有る
木母す

口をくく上提とあり上提のむ 乞

一瓢上人のこゝろのむねをわらへし

○ 峯をくく秋をむむ 若のこゝろ 乞

一瓢上人の秋室の徳を何ぞとせしむ
れしむるは徳なりしむるは徳なり
の提に徳を汚さるる

○ 五ちのめ 徳のむねをわらへし
徳美 長

福金のこゝろのむねをわらへし
志のむねをわらへし 十二の徳をわらへし
この徳をわらへし 一期の徳をわらへし
志のむねをわらへし 徳のむねをわらへし
ものこゝろのむねをわらへし 徳のむねをわらへし
く徳をわらへし 徳のむねをわらへし

一 卯月より是して罪を十寸鏡 有る
観音を徳

一 只たのめをわらへし 徳のむねをわらへし 一 徳
二月十七日 保科詣

一 字もつるむるある本陰も 有る 徳 乞

涅槃像跡のたよりある僧いたる 落梧

前業所感

虫河や猫の爪とく 因果経 西吟

深着世界無患心

つものよと親あそぶぬ火焼ぬ 嵐雪

三界無安猶如火宅

六月の行ぬと云居る者出りぬ 越人

草木國土悉皆成佛

空の氣や桜樹もまゝに佛も 野坡

隨縁真如

村あると照るもの空の色 丹野

即ち即佛

交陰の音存いほんの佛の氣 愚益

三界唯一心

百生りや夢一まぢの心より 千代

不樂間浮提濁惡世

此中の住居いふと 春 換 蝶着

高野山にて

おま紫の於ていりふるあ川の月 寧松

妙美

五月のやあはれぬ山の院 一葉

秋寺

存の外倍ふ葉を何の秋のむ 一葉

八月二十九日 日光寺詣

本寺の柱に長崎の舊友たれたる月
二十八日詣りて志す。こころも今
三十年前解りし昔あらんおのれ彼地に
とまらざらん。錫のものを管の笑ひのしり
むすまへん。人言はた。はなはたのまの
しんじの面會し。うらむ。語らむ。心
ものそ。牛に。四る余里の道程入。こも
ぬれ。うらむ。ひは。世に。うらむ。こころ
あれ。うらむ。こころ。うらむ。こころ。うらむ。こころ

・ 近江のよのよ書物にして秋のきる 一葉

平賀の扇書

氣法師の秘の書

李院のぬ 中絶ありて。慈覺大師の
作ぬふ出山の言像を。うらむ。うらむ。
浄容の憔悴する。六年。雪山の遊行。四
層。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。
柔ふらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。
のふらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。
出現のふらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。
山歌を。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。

をもて六の阿比陀佛をまつたにさなり
 一鉢をいそくに安置し—あふとて元木
 の名いあひしうや彼は元周縁流るる
 流れあれたるありしに於て此夕はに
 そま彩ある布をまつて清き拭—
 きのぬ実とらふやほほしりの鱗いの
 つらふ仙縁とていれ網のめ病の備を
 せんるしは雲の吼らん歌のさあるる
 法教のむし魚もはてしなく月の一
 皆得解脱 普門品
 人間にかうはれんまはさるる虫 寒松

龍女成佛 持世品

延虫の子や若もあくくうの春の風 寒松
 かみつふふいひ立ちる能親世音板東のれ不
 接手合を縁はまより孝のあまたぬ 全
 乙女の志はぬ新あり 興 の院 暮 古
龍女成佛
 ままあつと—染ちの古ひたり 全
 三月四日末大寺夜櫻の下に拈ふ
 乙女の月又買戻けいのちう風 法
 龍花寺

・日くは雲飛うと不二に響き渡り 暮方

志もつたは徳を成すの庭下に七色の

庭よりこぼれり

・庭よりまや軒を花瓶と紅紅葉 乞

妙音も梅手上人を訪ふ庭前

・昔茶も葉も品のおもひの氷 乞

青面金剛

○藤まゝ人の顔あり山さくらら 源信

文殊 そとを祇園のわきまに

・何る智恵をかぐ ことまげ 山叩

池上

八景の道者もさしつかへなく 烏谷

石山

・志つらうや岩にこぼる禪の夢 翁

立派なまを

・古井戸を覗きたまはる何れも 懸城

外面似菩薩内心如夜叉

・ころころたんとはる命のうらみ 大琴

皆是吾子

・接子や思ふも是れも茶の香 希周

道林

仕人ひさし 障の中にある若くは 祇貞

羅漢寺

乳いれく羅漢の何ふらさの存 涼唄

菊麻子

さそい皆糸のあやあり 菊のこ 冠子

三井寺等覚院にて湖上の月を

あざ陽る月の涼色に花の波 季吟

如是我聞

稲妻の二友めいこころもろ木橋 白鍬

後羅道

枯芦の起し戦ふ一しくれ 流し

羽黒

月くつや雪を薫くも申 谷 翁

斐定山に宿

志く雪を下界の瀧は福友の流 素世

八坂

あまの五寸室も流ぬあまの橋を水也 素林

三河風毒も

雲をれて六本杉の旭 水 乞

同

こもとのあまを登る山歌の歌 嵐雪

同

夜霧のくつ行出くもる雲は流 華

石山

雪ふるの岩を踏んで紅葉の
素雪

いづし海

○回廊に汝を待たせぬも麻を掃
台

高野山

何佛をよそもる秋の山うら
言ふ

左京を

僧りきの志つらむふ昔うぬ
吾備

石山

石山の衣箱も正しき月の
希周

左京を

○里の子の裸も涼し筒井筒
麦林

須戸をこし

○菊の音に池よふし暮る原に秋
暮村

石堂にのり

○雪の音のくもりに
深更

妙善山にて

○思ふに雪の音のくもりに
焼茶

月

○志ふ雪の音のくもりに
深更

吾光を

○よれたる我にも法の光りぬ
台

河内親心書にて或房の庵に牡丹の
さうりあるを以て

楠の蔭ぬれし 牡丹の影 千菊
堂定光山

〇 見うくれし雪にうらり 牡丹と我 十六
吾光寺詣まゐる時

桂の木のもつれくもとり 葉の風 華葉
高野にて 十四三〇

卯塔れも表やげたる 牡丹月 二五
菊麻寺おくのぬんにて

おの甘る人をまにまゐる 山花の 乞

南院よ冥室付あたま 多し中

いよふ松の法持上人 山花の影

松のけの硯あり 山のよ馬蹄
とくまゐり 硯のうみの形容とを

松信の硯と墨を志くれぬ 乞
上行す

灌仏や墓にむく 獨 言 乞
久世の又殊にて

或は法或は富貴 夢の 海 洪く
左系す

ま柳も我肩をぬぬく 乞 乞

大土輪寺

葛津に獨こところる葉摘れ
遊高海寺

あゝものつ鴨といふ舟の人の汗
臨川寺 法徳

風の地まき落さぬし〜れ引
去耳
冬の衣 阪屋まにて

杉のその重能へおの 露
地獄 去考

落能や火振悔あきこのの
地獄 遊
餓鬼 百里

子を捨る者者の門や言灯籠
畜生 台

馬士も倒れ外郎の末の妻
修羅 台

辻にた切ちし〜る 西瓜裁
人道 台

更〜き身を恨くや生身毫
天道 台

稲妻のらつ〜に笑ふ聲の風
声聞 台

秋風や梢をさすれぬ 蝶の空
台

縁覚

蓮のまゆも風はりのふんまきん

る里

菩薩

躍子の母のわさねる菩薩卦

を

宮崎

葦原やまのたてしう移りつゝ時

葦村

春

江東の孝由の祖父の懐いの

法るよ木の〜経文巻の石川

白の福院の老ぬといふ事

春

小服紗よ光をやとせまつる

角上

さゆいそ

春

そのもよたふさゆり奥の院

杜酒

貞享つらげく辰の歳

隆生一日 東照宮の別當

僧正の法房に慈惠大師遷

座極事法華の講の侍る

そのきりなれも徳ゆまらり

て序品のころ

春

散花の月いむりしう

越人

女房の徳ゆあつて法華

それなく暗きあり 龍女成

佛の如く有りて志の正

あつても空しくむ声の如く

ほろり〜と為るあつても空しくむ

越人

即身即佛

春 暎の晝寝かゝりんの佛

愚益

藥王品七句

如寒者得火

春 小川白くもむれんの暎〜

胡及

如裸者得衣

冬 雪の日に酒樽拾ふあまの

全

如商人得主

夏 双鳥六のあひてよひこむつ

全

如子得母

冬 竹多きをけも取つくさけび

全

如渡得船

秋 月の以隣の板木中より

全

如病得醫

夏 けもくとき法あるん付る山色が

全

如暗得燈

秋 秋のよむおひゆるときに起す

全

祖師五るる法忘法会二章

春 あくれ命あてむとあつても

千代尼

春 す衆の在るる水にぬるる増りきり 天代尼

全

地もさるる條にぬいぬをまこれが 全

三の偏西光をま

六 月の草もくちり極多しをのさ 柳居

淡草寺

雀多しや松木よむの秘りりる 全

市川 藤原

七 竹のちやおちめ乃の目の葉 全

本母寺

八 花よ鉦いりある 罪のほろふらぬ 士朗

菩提山 萱堂より

九 念佛を来かむやうにるを 全

南都の般若寺

春 子ぬこもる花や般若の紙の写 去耳

梅本寺よ花ひり

松杉をうちこして望む風 丈牒





